南山大学大学院
入学試験問題集

人間文化研究科

キリスト教思想専攻（博士前期課程）

宗教思想専攻（博士後期課程）

2024年度

NANZAN UNIVERSITY

目　　次

≪キリスト教思想専攻（博士前期課程）≫

基礎知識に関する筆記試験（神学領域）……1
（哲学領域）……3
（宗教学領域）……4
外国語に関する筆記試験　（英語）……5
小論文　（哲学領域）　〔社会人入学審査〕……7
（神学領域）　〔国内在住外国人入学審査〕……8
（哲学領域）　〔国内在住外国人入学審査〕……9

≪宗教思想専攻（博士後期課程）≫

専門領域に関する筆記試験（神学領域）……10
（哲学領域）……11
（宗教学領域）……12
外国語に関する筆記試験　（ラテン語）……13
（英語１）……14
（英語２）……15
小論文　（哲学領域）　〔国内在住外国人入学審査〕……16

２０２３年度南山大学大学院 人間文化研究科 キリスト教思想専攻（２０２３年９月入学）
２０２４年度南山大学大学院 人間文化研究科 キリスト教思想専攻（２０２４年４月入学）
＜博士前期課程＞一般入学試験

（２０２３年７月８日実施）　試験科目：基礎知識（神学）　配点：１００点

（問　題　紙）

以下の設問すべてに答えなさい。全体として解答紙３枚におさまる分量で書くこと。

１．旧約聖書と新約聖書の関係について説明しなさい。神学的・歴史的な観点から連続性、相違点、成立事情などについて述べること。

２．「この世界は悪や苦に満ちている。こんな世界を神が作ったはずがなく、神など存在しない」という主張について、(A) この主張の背景にある前提や論理を簡潔に整理したうえで、(B) この主張に反論しなさい。どんな視点からの反論でもよいが、具体的な神学者・思想家の立場や特定の理論にかならず言及すること。

３．今後あなたが研究したいテーマを説明し、その意義について論じなさい。先行研究の状況やあなた自身のこれまでの研究内容や学問的関心にもふれること。

問題おわり

（問　題　紙）

次の文章は初期キリスト教において三位一体論の教義が成立した過程を論じる文章の一節である。これを読んで下記の問いに答えなさい。各問の解答の分量は定めないが、全体として解答紙 3 枚におさまる分量で書くこと。

初期キリスト教の人々は、そのような解答に際して、あるいはギリシャ的合理性の主張する理論にくみし、(1)あるいはそれを全く捨てる。しかし、第三の人々はその中間をとり、ギリシャ的合理性にとっては荒唐無稽である愛と救いの物語を、その非理論性または前理論性を意識しながらも放棄することなく、同時にまた理論性をも放棄せず、既成の理論と人間的要請とをぎりぎりまですり合わせ、必要な場合には前者を後者に合わせて解釈し変え、つくり変えようとする。実践的・人間的モチーフが主となって理論を用い、導くという構造は、実はあらゆる理論の根もとにあることかもしれないが、(2)キリスト教の「正統」と呼ばれる人々を特徴づけるのは、この構造についての確固とした意識である。ただし、それは理論性にとっては多難な道であり、この道がどこまで誠実な理論性によって歩みうる道なのかが、つねに問いつづけられることになった。

この場合、実践的・人間的関心とは、パウロの物語における愛の働きが、したがって、救いの効力も、最大限たるべきだという要請である。そのためにはまず、贖罪の犠牲者が、もっとも尊く、もっとも罪なき者であることが求められる。そのためには、「神のひとり子」が神そのものであるのがもっともよい。しかし他方、福音書で神の子は自ら「父なる神」について語っているし、聖霊も、子とも父とも異なるあらわれ方をしている。この二つの視点を両立させようとするとき、(3)神は一にして三であるという背理が生ずる。

坂口ふみ『信の構造――キリスト教の愛の教理とそのゆくえ』岩波書店、2008 年、190 頁。

問１　下線部(1)に相当する考え方について、人名や思想内容を例示して説明しなさい。

問２　下線部(2)について、筆者はキリスト教の正統派にどのような特徴を見いだしているか、第一段落の内容にもとづいてわかりやすく説明しなさい。

問３　下線部(3)について、初期キリスト教ではこの「背理」を説明する様々な教説が現われて論争がおこなわれた。この論争の内容や意義について論じなさい。

問４　神秘とそれを語る言葉との関係について、あなた自身の考えを述べなさい。

問題おわり

（問　題　紙）

次の文章を読み下線部に関する後の問に答えよ。

著作権の関係により掲載しておりません

I・ハッキング『言語はなぜ哲学の問題になるのか』伊藤邦武訳，勁草書房，1989 年，54–55 頁。（原著：Ian Hacking, *Why Does Language Matter to Philosophy?* Cambridge University Press, 1975）

問①　アリストテレスの論理学に関する著作について知るところを述べよ。

問②　ジャンセニウス派の恩寵をめぐる主張について説明せよ。

問③　チョムスキーの言語理論について知るところを述べよ。

問④　マールブランシュの「機会原因論」について簡潔に説明せよ。

問⑤　観念（英 idea，仏 idée，独 Idee）について，西洋哲学史上の具体的な人物（あるいは学派）の説をとりあげ，あなた自身の考えも含めて論述せよ。

問題おわり

（問　題　紙）

以下の設問すべてに答えなさい。全体として解答紙３枚におさまる分量で書くこと。

１．宗教と身体について、具体的な事例や学説を紹介しながら論じなさい。

２．次の事項から三つを選んで説明しなさい。選んだ記号を最初に明記すること。

(a) 宗教上のタブー
(b) 上座部仏教
(c) シャリーア
(d) 寛容／不寛容
(e) 宗教と環境問題
(f) オリエンタリズム

３．今後あなたが研究したいテーマを説明し、その意義について論じなさい。先行研究の状況やあなた自身のこれまでの研究内容や学問的関心にもふれること。

問題おわり

（問　題　紙）

次の英文を日本語に訳しなさい。

The general feature of human life that I want to evoke is its fundamentally *dialogical* character. We become full human agents, capable of understanding ourselves, and hence of defining an identity, through our acquisition of rich human languages of expression. For purposes of this discussion, I want to take "language" in a broad sense, covering not only the words we speak but also other modes of expression whereby we define ourselves, including the "languages" of art, of gesture, of love, and the like. But we are inducted into these in exchange with others. No one acquires the languages needed for self-definition on their own. We are introduced to them through exchanges with others who matter to us — what George Herbert Mead called "significant others." The genesis of the human mind is in this sense not "monological," not something each accomplishes on his or her own, but dialogical.

Moreover, this is not just a fact about *genesis*, which can be ignored later on. It's not just that we learn the languages in dialogue and then can go on to use them for our own purposes on our own. This describes our situation to some extent in our culture. We are expected to develop our own opinions, outlook, stances to things, to a considerable degree through solitary reflection. But this is not how things work with important issues, such as the definition of our identity. We define this always in dialogue with, sometimes in struggle against, the identities our significant others want to recognize in us. And even when we outgrow some of the latter — our parents, for instance — and they disappear from our lives, the conversation with them continues within us as long as we live.

出典：Excerpt from The Malaise of Modernity copyright (c) 1991 by Charles Taylor.
Reproduced with permission from House of Anasi Press Inc., Toronto. www.houseofanasi.com

問題おわり

（問　題　紙）

次の文章は告解制度の成立について述べたものである。全文を日本語に訳しなさい。

Saint Augustine's *Confessions* (397–98) offer the example of an individual's accounting for his life, including his years of sin, in terms of his conversion to the faith. But there is no moment in the *Confessions* that records the practice of confession as we have come to know it—Augustine confesses directly to God—and indeed nowhere in his writings on Christian ethics and duties does Augustine address the task of the confessor. The proto-modern practice of confession appears to have developed as part of monastic practice, in the monk's examination of conscience with his spiritual director. The origins of such self-examination may lie in the "Desert Fathers," who made confessions (though without absolution) to their elders. Private confession seems to have taken precedence over the ancient practice of public penance largely through the influence of the Irish clergy in the seventh century, though public penance certainly continued to be practiced, especially for grave public sins. The Irish clergy—who kept learning alive at a time when much of the Continent suffered the aftermath of the barbarian invasions—provided the first "penitentials," guidebooks for confessors that taught them how to listen and what to listen for, detailing the sins they would encounter and suggesting appropriate means for their remission—a genre that would have a long future and provide society with its definitions of the acceptable Christian life over several centuries.

What is often referred to as the "Twelfth Century Renaissance" saw an increasing emphasis on the individual's self-examination, which we may view as evidence, and perhaps precondition, for the emergence of the "modern" sense of guilt and individual responsibility. Legal practice evolves in a similar manner—it would be difficult to determine precisely how law influences religious practice and religious practice the law; no doubt there is a reciprocal influence at work.

出典：Used with permission of University of Chicago Press – Books, from Troubling Confessions : Speaking Guilt in Law and Literature by Peter Brooks, 2020; permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.

問題おわり

（問　題　紙）

次の英文を読んで下記の二つの設問に日本語で答えなさい。解答の字数は定めないが、全体の分量が解答紙２枚におさまるように書くこと。

著作権の関係により掲載しておりません

（出典　Alasdair MacIntyre, *After Virtue: A Study in Moral Theory*, Second Edition, University of Notre Dame Press, 1984, pp. 110-111.）

問１　英文の内容にもとづいて筆者の主張を要約しなさい。

問２　哲学史を研究する方法と意義について、あなた自身の考えを具体的事例を示して述べなさい。上の文章に言及しなくてもよい。

問題おわり

（問　題　紙）

次の英文は教父と古代ギリシャの学問の関係について述べた文章の一部である。これを読んで二つの問いに日本語で答えなさい。解答の字数は定めないが、全体の分量が解答紙２枚におさまるように書くこと。

【1】英文の内容をわかりやすく要約しなさい。（テルトゥリアヌスとクレメンスの対比に着目すること。）

【2】キリスト教思想と古代の学問の関係について具体例をあげて論じなさい。この英文の内容に直接関係しない内容でもよい。

著作権の関係により掲載しておりません

出典　Richard E. Rubenstein, *Aristotle's Children: How Christians, Muslims, and Jews Rediscovered Ancient Wisdom and Illuminated the Middle Ages*, Harcourt, 2003, pp. 50–51.

問題おわり

（問　題　紙）

次の英文を読んで下記の二つの設問に日本語で答えなさい。解答の字数は定めないが、全体の分量が解答紙２枚におさまるように書くこと。

著作権の関係により掲載しておりません

（出典　Alasdair MacIntyre, *After Virtue: A Study in Moral Theory*, Second Edition, University of Notre Dame Press, 1984, pp. 110-111.）

問１　英文の内容にもとづいて筆者の主張を要約しなさい。

問２　哲学史を研究する方法と意義について、あなた自身の考えを具体的事例を示して述べなさい。上の文章に言及しなくてもよい。

問題おわり

（問　題　紙）

以下の設問すべてに答えなさい。全体として解答紙３枚におさまる分量で書くこと。

１．キリスト教における「無からの創造」について説明しなさい。

２．次の事項から三つを選んで説明しなさい。選んだ記号を最初に明記すること。

(a) 知恵文学
(b) パウロの宣教旅行
(c) fides quaerens intellectum
(d) トリエント公会議
(e) 告解（ゆるしの秘跡）
(f) プロセス神学

３．今後あなたが研究したいテーマを説明し、その意義について論じなさい。先行研究の状況やあなた自身のこれまでの研究内容や学問的関心にもふれること。

問題おわり

（問　題　紙）

以下の設問すべてに答えなさい。全体として解答紙３枚におさまる分量で書くこと。

１．哲学と他の学問分野の関係について、あなたの考えを述べなさい。この主題に関して、たとえば、思想史上の展開に着目したり、現代社会がかかえる諸問題の解決に着目したりすることができるが、どんな着眼点から論じてもよい。

２．次の事項から三つを選んで説明しなさい。選んだ記号を最初に明記すること。

(a) 洞窟の比喩
(b) ストア主義
(c) species intelligibilis
(d) 良心
(e) アリストテレス『形而上学』
(f) デカルト『情念論』

３．今後あなたが研究したいテーマを説明し、その意義について論じなさい。先行研究の状況やあなた自身のこれまでの研究内容や学問的関心にもふれること。

問題おわり

２０２４年度南山大学大学院 人間文化研究科 宗教思想専攻（２０２４年4月入学）
＜博士後期課程＞一般入学試験

（２０２４年2月２４日実施）　試験科目：専門領域（宗教学）　配点：１００点

（問　題　紙）

以下の設問すべてに答えなさい。全体として解答紙３枚におさまる分量で書くこと。

１．宗教と身体について、具体的な事例や学説を紹介しながら論じなさい。

２．次の事項から三つを選んで説明しなさい。選んだ記号を最初に明記すること。

(a) 宗教上のタブー
(b) 上座部仏教
(c) シャリーア
(d) 寛容／不寛容
(e) 宗教と環境問題
(f) オリエンタリズム

３．今後あなたが研究したいテーマを説明し、その意義について論じなさい。先行研究の状況やあなた自身のこれまでの研究内容や学問的関心にもふれること。

問題おわり

（問　題　紙）

次の文はアウグスティヌス『再考録』の一節（*Retractationes*, II, 43）で，『神の国』（*De civitate dei*）を執筆した背景を回想している箇所である。全文を日本語に訳しなさい。

Interea* Roma Gothorum irruptione agentium sub rege Alarico atque impetu magnae cladis eversa est. Cuius eversionem deorum falsorum multorumque cultores, quos usitato nomine paganos vocamus, in christianam religionem referre conantes, solito acerbius et amarius deum verum blasphemare coeperunt. Unde ego exardescens zelo domus dei** adversus eorum blasphemias vel errores libros de civitate dei scribere institui. Quod opus per aliquot annos me tenuit, eo quod alia multa intercurrebant, quae differri non oporteret et me prius ad solvendum occupabant. Hoc autem de civitate dei grande opus tandem viginti duobus libris est terminatum. Quorum quinque primi eos refellunt, qui res humanas ita prosperari volunt, ut ad hoc multorum deorum cultum, quos pagani colere consueverunt, necessarium esse arbitrentur, et quia prohibetur, mala ista exoriri atque abundare contendunt.

注　* Interea（そのあいだに）は前章の内容を受けている。
　　** zelo domus dei「神の家への熱情によって」。「詩篇」からの引用。

問題おわり

（問　題　紙）

次の英文の全体を日本語に訳しなさい。

著作権の関係により掲載しておりません

〔出典〕Thomas J. Keeline, *The Reception of Cicero in the Early Roman Empire*, Cambridge University Press, 2018, p. 196.

問題おわり

（問　題　紙）

次の英文の全体を日本語に訳しなさい。

The relevant context of the use of the terms "belief" and "unbelief" was of course religious. It does not seem useful here to attempt discussion of "What is religion?" in general terms. At certain points aspects of that question will arise and can be dealt with on those occasions. Since, however, the concept belief is so central, a brief commentary on it does seem to be in order. First a point of logic. In Western culture at least there has been a strong tendency to think in terms of dichotomies, often accentuated in their mutual exclusiveness by such expressions as "versus." Thus we have rational versus irrational, heredity versus environment, *Gemeinschaft* versus *Gesellschaft*.

If members of such dichotomous pairs are to be treated as types, however, they have frequently turned out, not only to admit of intermediate or mixed types, but to be resultants of a plurality of variables, so that study of the possible combinations of the component variables might at the typological level, yield, not a single dichotomous pair, but a larger "family" of possible types, which differ from each other, not on one, but on several dimensions.

I think—or "I believe"—that this is true of the concept of belief itself, at religious and at other levels. I might suggest that stating the problem in terms of belief-unbelief is already a start in this pluralistic direction in that the alternative to belief need not be simply disbelief but might be some way of avoiding being placed in the category either of believer or of disbeliever. The logic here is similar to that involved in the history of the concept of rationality and its antonyms. Namely, it was a major advance when rationality was contrasted not with irrationality but with nonrationality; there could be types which, though nonrational, were not irrational.

出典：Used with permission of University of California Press – Books, from The Culture of Unbelief : Studies and Proceedings from the First International Symposium on Belief Held at Rome, March 22–27, 1969 by Rocco Caporale, 2018; permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.

問題おわり

（問　題　紙）

次の英文を読んで下記の二つの設問に日本語で答えなさい。解答の字数は定めないが、全体の分量が解答紙２枚におさまるように書くこと。

著作権の関係により掲載しておりません

（出典　Alasdair MacIntyre, *After Virtue: A Study in Moral Theory*, Second Edition, University of Notre Dame Press, 1984, pp. 110-111.）

問１　英文の内容にもとづいて筆者の主張を要約しなさい。

問２　哲学史を研究する方法と意義について、あなた自身の考えを具体的事例を示して述べなさい。上の文章に言及しなくてもよい。

問題おわり

発行：南山大学入試課
名古屋市昭和区山里町18番地
Phone：(052)832-3119
Ｆａｘ：(052)832-3592
E-mail：ml-grad@nanzan-u.ac.jp
URL：https://www.nanzan-u.ac.jp/